

会員企画シンポジウム 1

9月3日(日) 10:00~12:00
パシフィコ横浜 メインホール

心理臨床とスピリチュアルケア

企画／話題提供者： 大村 哲夫（上智大学）
 話題提供者： 倉光 修（放送大学）
 話題提供者： 松田 真理子（京都文教大学）
 進行： 瀧口 俊子（放送大学）
 指定討論者： 岸本 寛史（静岡県立総合病院）
 和田 信（大阪国際がんセンター）

【シンポジウムの趣旨】

1998年、世界保健機関（WHO）執行理事会で spiritual health が取り上げられて以来、医療・看護の領域で注目を浴びている「スピリチュアルケア」は、心理臨床の世界では馴染み深いとはいえ、別のもののように聞こえてしまう。しかし企画者は、心理臨床の中にスピリチュアルケアが含まれ重要な役割を果たしていると考えている。

心理療法には技法として習得することができる部分と、技法によらずクライアントとセラピストの人格（パーソナリティ）に依拠する部分とがある。後者では、両者の个性的な人格が相互に響き合っただけで唯一無二のケアが生まれることになる（大村 2021）。河合隼雄がひらがなで、「こころ」や「たましい」と呼んだものに関わるケアは、スピリチュアルケアと大いに重なっているといえるだろう（大村 2022）。

【シンポジウムの概要】

本シンポジウムでは、心理臨床におけるスピリチュアルケアに注目し、倫理的に配慮された事例等を通して多方面から検討を加え豊かな心理臨床に資することを目指したい。

登壇者は、SBNR（spiritual but not religious）を志向する倉光 修（放送大学）、医療と芸術・宗教性に関心を抱いている松田真理子（京都文教大学）と宗教と文化に関わる心理に関心をもち大村哲夫（上智大学）が話題を提供し、指定討論を心理臨床に関心のある内科医岸本寛史（静岡県立総合病院）とがん緩和医療に関わる精神科医和田信（大阪国際がんセンター）、進行をスピリチュアリティ・たましいの働きに関心を抱いている瀧口俊子（放送大学）が行う。より具体的に述べると、

倉光修は、自身の統合的心理療法のなかで、あるいは、自分のこれまでの人生のなかで、いかに宗派を超えるスピリチュアリティに関わってきたかを含めて話題提供する。

松田真理子は、医療や産業、教育領域での自験例におけるクライアントの夢や語りの中に感じたスピリチュアリティをとりあげ、話題提供する。

大村哲夫は、認知症をもつ高齢男性への162回におよぶ面接を振り返り、夢や幻覚におけるスピリチュアルなエピソードの出現が穏やかな死への移行をもたらした事例を通して、セラピストのスピリチュアリティに開かれた態度の重要性を述べる。

指定討論の岸本寛史は、臨床心理学と医学の二つの観点から複眼視を行うという立場からコメントを行い、同じく指定討論の和田信は、精神医学と命の臨床で心と身体の間にかかわる視点でアプローチする。

全体の進行を司る瀧口俊子は、本シンポジウムを通して参加者と真の心理臨床を追求したいと考えている。

本シンポジウムは対面での実施となる。同じ場と空気を共有するなかで、心理臨床とスピリチュアルケアについて深められる場となることを一同楽しみにしている。なお本シンポジウムの成果は、『心理臨床に活かすスピリチュアルケア』（2024）としてまとめていく予定である。

瀧口・大村・和田編著 2021『共に生きるスピリチュアルケア—医療・看護から宗教まで』創元社

大村哲夫 2022「触れることと触れないこと—スピリチュアルケアにおける倫理的ジレンマ—」『宗教研究』404, pp.55-78